

///『排除しない』学級経営///・・・理論学習会より

多くの若い先生方が小中の違いを越えて学習できる場として、理論学習会を毎月開催してきました。学校現場は実に多くの課題を抱え、教室の中で問題に直面しながら毎日が過ぎていくのです。しかも、それらの問題が一気に解決に向かうことはほとんどありません。粘り強く、あきらめずに向き合うことでしか、その出口は見えてきません。落ち着かずに授業中立ち歩いてしまったり、感情があふれだしてしまう子どもたち。中学校では学習への意欲をすっかり失い、机に突っ伏したままの生徒……。そんな子どもたちの思いに、なかなか応えてあげることができないのです。

弱い立場におかれた子どもたちを支えたい……。そうした子どもたちの味方である先生たちのお手伝いをしたい……。そんな思いから立ち上がった「Ed.ベンチャー」ですが、現場の様子を知るたびに、子どもたちにとっても先生にとっても、「つらい」現状が広がっているのがよくわかります。だからこそ、「小さな出口でもみんなで一緒に探したい!」。理論学習会が、若い先生や子どもたちに少しでも役に立つことを願っているのです。

5月の内容を紹介します。

5月は、「排除しない学級経営」というテーマのもとに、小中それぞれの実践報告をして頂きました。

小学校からは、違う者同士が出会う場所が「教室」であると考え、そこでは「豊かさの循環を求めて、励まし合いよりも衝突が必要」と報告されました。そのため、子どもたちには、どの立ち位置から他者に関わろうとしているのかを、その都度問いかけます。「先生、〇〇が◎◎してたよ」と言いつけに来る子どもには、「あなたは誰の味方なの?」と問い返します。様々な場面で立ち位置を確認することで、他者との関係性を問い直すのです。この実践で特徴的だったのは、教室にいたくないという子どもが作り始めた教室の後ろの段ボールの家を、やがてはいろいろな子どもたちが参加して大きな家を作り、いやなこと、自分で整理できないことが起こると、その家に入るようになったことです。いままでは、何かあると教室を飛び出していた子どもも家の中に「避難」するようになり、授業中であれば、誰かがポストにプリントを入れてあげて、家の窓から授業を受けるようになったというのです。小学4年生の教室です。

中学校は、隣の座間市での実践が報告されました。家庭的にも困難を抱え、非行にはしている男子生徒がクラスに転校してきました。彼をどのように受け入れ、成長させていったのかという報告です。どんな場面でも「そんなことはできるよ!」と過剰適応してしまう彼は、結局はできない自分をさらけ出してしまいます。そんな彼に報告者は、「毎朝ご飯を食べること」「毎日少しでも鉛筆を持つこと」「みんなが大事に思うものを踏みにじる行動はしないこと」という約束をします。そして、その約束を果たすべく、報告者はその生徒への援助に入ります。朝ご飯を食べていなければ、職員室の片隅で、用意してあった軽食をとらせ、学校を飛び出して帰ろうとしていれば、呼び止めて鉛筆を持たせて「美文字トレーニング」を一緒にするのです。こうして、必ず約束を守らせて「ほめる」のです。悪い評判ばかりが聞こえてきた彼でしたが、転校してきて、一度もみんなが大事に思うことを踏みにじるような行為をしたことはないそうです。頻繁に出している学級通信を年度終わりに文集のように閉じて、みんなの作文も入れて渡します。その作文は、小学校の低学年で扱われることの多い「先生あのね」作文です。クラスの子どもたちに報告者はいいいます。「小学生になって書くだよ。だから、難しい漢字や難しいことばを使ってはいけないよ。」と。中国から来て日本語がまだ苦手な子どもも、普段ほとんどしゃべらない子どもも、そして報告された転校生も、みんな安心して、たどたどしい文字で書くのです。こうして、自分の思いを伝えて、クラスは次の学年へ向かうのです。

お二人の先生の実践報告は、考えさせられることが多く、そして自分たちの教室でも何か見習えそうな報告でした。

3年後の震災支援・被災家族の今

あの日からもう3年と3ヶ月がたちました。Ed.ベンチャーとして取り組んできて、本当に無力感とともに、ため息がでるばかりです。「ほとんど解決されていない」事実ばかりが、現地には未だに転がっています。神奈川に住んでいると、この「ほとんど解決されていない」ということさえ、なかなか伝わってはこないのです。逆に、「少しはよくなったんじゃないか」といった安易な楽観視が、なんの根拠もなく広がっているのではないのでしょうか。

Ed.ベンチャーは、震災当時から、風評や予測によるのではなく、「現地から考える支援」を心がけてきました。その基本的な姿勢は今も変わっていないつもりです。わたしたちの連携団体である「ライオン学校」(宮城県石巻)の報告から現在の子どもたちと家族の様子を知り、今一度、被災地に自分自身が立ったつもりで、今の私たちができることを考えて頂きたいと思います。以下、5月17日・18日のライオン学校の報告の一部です。

新校舎での運動会～復興は遠い?～

ライオン学校の活動には、近隣の2つの小学校に通う子どもたちが参加しています。5月17日の支援日は、偶然にもこの2つの小学校の運動会と重なりました。一方の小学校の運動会に参加するのは今年で3度目です。一方で、もう一つの小学校については、私たちがその小学校を見に行くこと自体、初めてのことでした。その小学校は3.11の津波で壊れてしまい、ずっと改修工事が行われていたためです。その改修工事は今年の3月に終了し、新校舎で初めての運動会が行われることになりました。私たちが駆けつけると、ちょうど運動会の歌を歌っているところでした。子どもたちの元気な歌声がにぎやかに響く一方で、校庭はなんとなくがらんとしています。震災後、入居できた仮設住宅や、新しい家の位置関係で転校を余儀なくされた児童が多く、児童数は震災前に比べて半分ほどに減ってしまったそうです。そのため、運動会も午前中だけのプログラムになっていました。この小学校にはライオン学校に参加している小5の男の子が通っています。私たちがその男の子を探していると、男の子のお母さんとおばあさんが、私たちを見つけて声をかけてくれました。久しぶりに会った男の子のおばあさんは、早々に「抽選で復興住宅への入居が決まったんですよ」と嬉しそうに教えてくれました。小5の男の子は、震災前までお母さんとおじいさん、おばあさん、おばさんと一緒に1つの家で暮らしていました。震災後はしばらく避難所で過ごし、仮設へ入居するときも、抽選が行われました。抽選で当たった仮設住宅は、家族みんなで住むには狭すぎたため、男の子はお母さんと2人で住み、他の3人は、少し離れたところにある仮設住宅に入居せざるを得ませんでした。今回復興住宅が当たったと聞いて、やっとまた家族全員で暮らせるのかと思いましたが、当選した部屋は、男の子とお母さんが暮らすスペースしかないようです。おばあさんたちは、また別で復興住宅の抽選に応募しなければなりません。さらに、男の子が復興住宅に入居できるのは、男の子が中学に入学する2年後の予定です。入居が決まった住宅はまだ建設されておらず、建設予定地の水田を均している段階です。おばあさんたちが復興住宅に入居できるのは、いったいつになるのでしょうか。(ライオン学校伝書鳩通信5/25より)

お知らせ

・・・理論学習会予定・・・

7月7日(月) 私たちはなぜ日本にいるのか・・・ チューブ サラーンさん

(時間は 19:15開始 会場は富士見文化会館です)

8月25日(月) 映画鑑賞会と簡単な討論 「SAYAMA みえない手錠をはずすまで」

(時間は 18:00?開始 会場は富士見文化会館です)

11月 「つながり格差が学力格差を生む」の著者“志水宏吉教授”(大阪大学大学院)をお招きします。日程は調整中。お楽しみに!

コラム(理事の独り言);

最近山口昌男「文化の詩学」を読んだ。「対話は声が低くてもかまわない。絶やさないことが必要なのである。」という文章に、激しく同意した。今日も少しでも続けていこうと思う。(M)